

まつ

にん

ラーモス
いじゅうち
移住地

さくら祭りに3500人



開会式にも州各地から多くの人が駆けつけた

また「絆」編集委員会の山本和憲委員長は「過去を振り返る中に未来を

感じる内容は約400頁、制作期間3年の大作への思いを述べた。歴史や各分野からの寄稿文、今後の事業計画などが全員ボ語訳付きで掲載されている。

尾中会長は州から異例の8万レアルの助成があったことを明かし「こういった活動ができるのは、州や市の協力のおかげ。今後も自然を愛し、文化を守る活動を続けたい」と謝辞を述べた。ロッキ・スタンゲリン州地域開発長官は「州としても文化振興に貢献しているこの祭りに関係をもてたことは光栄」と称えた。高領助成については梅田邦夫駐伯全権大使の同州公式訪問や同州から日本への食肉輸出が好影響を与えたと見られている。

会場を盛り上げたのは地元「さくら太鼓」の演奏やパラグアイのイグアス移住地から18人の大所帯で駆けつけた「鼓組」や岩手県伝統の「鬼剣舞保存会」の演技。観光に訪れていた南麻州のカンボ・グランデ文協婦人部一行40人の一人、城倉カオリさん(69、二世)は「小さな移住地なのに、これだけ文化を守ろうとする人

サンタカタリーナ州フレイ・ロジェリオ市のラーモス移住地のさくら公園で5、6日、同文化協会(尾中弘孝会長)が『第18回日本祭り』を開催した。同市人口2500人を大きく上回る3500人が来場し、アトラクションや日本食を楽しんだ。初日の開会式ではオズニー・アルベルトン市長、在クリチバ総領事館の森田聡領事らが出席し、50周年記念誌『絆』の発刊式も行われた。

50周年記念史『絆』発刊 日本茶を新産業に検討中

感じさせる内容になっており、主権者と来場者が一緒に祭り、笑顔で祭りは締めくくられた。会場を訪れたサンタカタリーナ州日系連合会・新里ヨシカズ会長は「この祭りは非日系にも注目されており、他の州内の移住地にとつての良いモデルになる」と話した。

尾中会長は「日本茶を新産業に」という熱い思いを抱いている。過去5年分の気象データを静岡県「茶業研究センター」に送り、「適した気候」であるとの認定も受けた。すでに自家消費用に栽培している人もおり、中央開発コーポレーション(CKC)の研修制度を利用して静岡県への派遣なども検討中だ。

尾中会長は「まとまった生産には5年間が必要だろうが、現に少量の生産に成功している農家もある。若い人たちに向けて次の農業の道筋をつけ

があることは素晴らしい」と感心していた。やきそばや寿司などの日本食が販売される中、特に人気を博していたのが静岡県から取り寄せた日本茶で、600杯を売り上げた。地元の非日系人セリア・ガルビスさん(54)は「健康にいい」という話は聞いていたけど味もいいわ」とすっかり気に入った様子。

最後は全員参加の盆踊り。主権者と来場者が一緒に祭り、笑顔で祭りは締めくくられた。会場を訪れたサンタカタリーナ州日系連合会・新里ヨシカズ会長は「この祭りは非日系にも注目されており、他の州内の移住地にとつての良いモデルになる」と話した。

尾中会長は「まとまった生産には5年間が必要だろうが、現に少量の生産に成功している農家もある。若い人たちに向けて次の農業の道筋をつけ

樹海

1964年入植のサンタカタリーナ州ラーモス移住地は43家族(約130人)と小粒ながら、味わい深い歴史を持つ。例えば「リングゴ」といえばサンジョアキン(以下サンジョ)と誰もが思うが、実はその原木はラーモスにある▼今月刊行された同地50周年誌「絆」によれば、68年に長野県から持ってきた小川和己農園に植樹された原木は、6年目のリンゴ樹に寝腐れ病が流行り、収量減で採算に苦しむ広まらなかった▼それ以前、初期の基幹作物ネクタリーナは65年に苗木が各農家に無償配布され、69年に初出荷。初の国産品とあつて聖市市場で、個1ドル以上の高値を呼び、入植者はテレビなど家電品を競って購入したとか。ところが入植10年目の74年、暴風雨で枝が傷付き再生不能となり絶滅させる一冊だ。(深)

「ふじ」類を台木にし、「ふじ」を高接ぎした。日本製へこだわりだ。でもそれが崇つたか5、6年目のリンゴ樹に寝腐れ病が流行り、収量減で採算に苦しむ広まらなかった▼それ以前、初期の基幹作物ネクタリーナは65年に苗木が各農家に無償配布され、69年に初出荷。初の国産品とあつて聖市市場で、個1ドル以上の高値を呼び、入植者はテレビなど家電品を競って購入したとか。ところが入植10年目の74年、暴風雨で枝が傷付き再生不能となり絶滅させる一冊だ。(深)

された「ふじ種」の原木が現存する。《この苗が親木になつて、後にブラジルの市場を席捲するリングゴ「ふじ種」となつて輸入国から自給国へと発展していく》(42頁)。でも成功一直線ではない▼ラーモスから60キロ離れたドイツ人移住地フライブルゴはリングゴの里として実績がある。そこで使っている種を台木にし、「ふじ」類を高接ぎした。日本製へのこだわりだ。でもそれが崇つたか5、6年目のリンゴ樹に寝腐れ病が流行り、収量減で採算に苦しむ広まらなかった▼それ以前、初期の基幹作物ネクタリーナは65年に苗木が各農家に無償配布され、69年に初出荷。初の国産品とあつて聖市市場で、個1ドル以上の高値を呼び、入植者はテレビなど家電品を競って購入したとか。ところが入植10年目の74年、暴風雨で枝が傷付き再生不能となり絶滅させる一冊だ。(深)

▼ラーモス指導のためにJICAは71年、近隣のヴィテイラ農業試験場にリンゴ博士後沢憲志さんを派遣した。前述の経緯もあり、コチア産組が74年にサンジョにリンゴ団地造成を始めた時、後沢博士が呼ばれ、ラーモスで育てられた苗木が植えられた。まるでラーモスが「台木」になつてサンジョが「高接ぎ」されたかようだ。歴史を残すことの重要性を実感させる一冊だ。(深)